Osaka University Knowledge Archive

Title	柳宗悦が見た台湾民芸
Author(s)	林, 承緯
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52762
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

柳宗悦が見た台湾民芸

林　承緯／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程

1943年（昭和18）春，柳宗悦の一行は東洋美術国際研究会と日本民芸舘の依託を受け，台湾の生活用品の調査活動をおこなうために訪台した。約１ケ月の滞在期間中柳は当時台湾に居住していた人類学者金関丈夫と画家立石鉄臣の協力の下に全島各地をまわり，漢民族の居住地域だけでなく原住民族（高砂族）が住む山深い奥地に分け入り，自分の眼で台湾の民芸に触れた。当時の台湾民芸はどのような状態であったのか。柳と現地の民芸の間にどのような繋がりが生じたのだろうか。本論は柳宗悦と「台湾民芸」を考察の中心とし，当時の文献の分析と論述を通じて，この課題を深く掘り下げる。

台湾民芸の調査過程は台湾の最北端に位置する基隆を出発し，台北，鶯歌，彰化，嘉義，台南，高雄，屏東，台東，花蓮，宜蘭などを訪ね，島を左回りに原住民族と漢民族の二系統の工芸品やその生産組織，手法，材料などを考察した。柳は台北にある中国南方地方の様式で建てられた林本源邸を訪れ，その建築物の力強い美を賞賛した。また台北近郊の鶯歌という焼物の里を訪問した際には，柳の台湾民芸に対するステレオタイプ的な認識が大きく変わった。柳は「従来，台湾には焼物は豊富でないと言ふ説であったが，行ってみると見るべきものが沢山残されてゐたし，現在も活発に作られてゐるのである。例えば，台北の近くにある鶯歌の村など，全村をあげて焼物を作り全村民が陶工であると云ふ状態であった。」と述べた。

次に北部を離れ，彰化，嘉義へと南下した。彰化の孔子廟がある敷地は交通を妨害しているために取り壊し計画が立てられていた。同年京城（現ソウル）の光化門の取り壊し計画について政府当局に強く計画の中止を要求したように，柳は彰化の地方政府に対しても取り壊し計画の中止を求めた。「単に往来をまっすぐする為に，立派な建物を壊すなんて，そんなことをするのは実に馬鹿なんだね。もう二度と建たないものぢゃないか。こんなのは道の方で避ければいいんだ。」この言葉から歴史建築物保存の重要性を唱える柳の堅い意志が見て取れ，それゆえ調査終了後の座談会の中で柳は改めて彰化の孔子廟や林本源邸などの伝統建築物を例にとり，それらの保護の重要性や台湾における歴史的建築物保護の制度の必要性を強調した。

柳は民芸運動の提唱と民芸論の構築の際，常々理想の工芸村に言及している。彼は工芸村のような生産形態こそが最も望ましい工芸品を生み出すことができると考えていた。台湾南部の関廟という竹細工を主な産業とする村を訪ねたとき，彼は次のように言った。「ああ面白かった。こりゃこの村一つ見るだけで台湾にわざわざ来た値打があった。……工芸村としては理想に近いものだ。」この言葉からは，関廟村についての驚きと喜びが滲み出ている。また，「竹細工では殊に台南州関廟のに打たれました。組織といい，仕事場といい，その仕事振りやその製品，（中略）恐らく世界の何処を探しても滅多にあるものではなく，工芸の村として吾々が頭で考えている一つの理想に近いものが，この世に実在しているような感がして実に驚嘆しました。」とも語っている。柳は理想的な工芸生産形態

に言及するとき，非個人が生産する工芸品こそが民芸の精神に合致し，集団組織からのみ正しい民芸品が生まれると述べた。関廟村で彼は自分の考える理想に近いものを目にした。村の住民は漢民族が大半を占め，漢民族の伝統的な大家族の生活形態を自然に形成していた。大家族は日常の生活あるいは労働の場においても，集団で行動する集団文化を構成し，なかでも工芸の場において高度な集団労働の形態を具えていた。それが柳のいう理想に非常に近い生産形態であった。

当時多くの人々は未開の蕃人であるとの蔑視感を原住民族に対して抱き正当な評価をしていなかった。しかし柳は彼らとは違い原住民族の民芸に尊敬の念をあらわし，また世間の人々も次第に柳の跡を追い原住民族とその芸術文化に注目するようになった。「高砂族の織った織物を，美しいと見る人は多い。併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀なのは不思議である。彼等を未開人と軽蔑してゐる人は，その布の美しさを知ってゐるとは思へない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考へる如きは僭越の至りである。」と柳は語った。

柳は台湾の民芸がもつ美しさを発見することにより日本本土の文化状態を再認識した。力強さを放つ台湾の民芸品が，日増しに薄弱になる日本文化を改善させることができると考えた。彼が考える理想的な工芸指導は，先ず各地における民芸産業の表現の幅を尊重し，そのあとに適切な美的判断力をもつ者がそれぞれの民芸産業を客観的に判断するということである。「内地の工芸は既に弱々しくなり，堕落しつつあるのですから，内地を見本としてはいけない。この土地の伝統を尊敬して，正しい意味でこれを生かしてゆかなければいけない。」一方，美の判断能力については以下のように指摘した。「ただ日本人はもののいい悪いを見わけることにかけては，世界でも第一流の眼をもっている。だから指導者としては日本人が介在した方が無難である。」この言葉は，柳の美の判断と地方色に対する許容範囲についての基準と限界を示している。すなわち地方の特色を尊重しながら，美の判断においては適切な判断能力が必須であり，これらを併せ持って初めて正確な美が創造されるということである。柳は内地の工芸指導員が日本中心主義の審美感でもって台湾工芸に関与するべきではないと反対した。しかし，日本人が「世界でも第一流の眼をもっている」という柳の考えこそが，彼自身の批判する日本中心主義そのものといえるのではないだろうか。

柳は台湾民芸の発見以外に，各種の工芸産業と造形文化の振興方法や伝統建築物の資料登録，建築物保護の法整備を提案した。台湾工芸発展について今日までの重要な事柄を顧みると，日本統治時代に存在した「台湾造形文化運動」，「台湾工芸協会」などのような工芸振興活動は，近年においては60年の中断の時を経て2005年から台湾政府行政院文化建設委員会の推進により「台湾生活工芸運動」という名で復活している。ここでは柳の事績についての展覧会や講演会が開催されており，彼が残した理念を学ぶことが試みられている。台湾工芸史における柳宗悦の役割は再考されるべき時にきているのではないだろうか。